

植物学者三好 學 研究資料 IV

安 藤 裕

まえがき

本研究紀要第12号(1994)に同題のII、IIIを載せたが、引続いて調査蒐集したもの、一部を研究資料IVとして、印刷に付すことにする。

本編の内容は、昨平成6年に思いがけず発見された、三好が岐阜県土岐小学校時代に認めた『授業日誌』下の紹介、三好が残した膨大な量の論文、論説などのうち纏め易いもの、リストと昭和11年(1936)の三好の「自伝」に就いてある。

資料は何れも三好自身の手になるものに拠っており、今回も資料の羅列となったが、これは前にも述べた通り、要請を受けている『植物学者 三好學 伝』刊行の準備のためのものである。そのためなるべく原本のコピイを付けるようにした。

今回は東京教育大学名誉教授伊藤洋先生、ドイツ、デュッセルドルフの和田昭治博士、茨城大学教育学部講師新井孝喜先生、前軽井沢町立図書館長岡部忠英氏、岐阜県岩村町教育長水野恭平先生、三好勝氏(學の甥)、三好進氏(學の孫)および渡辺庸子さんから種々のご教示と資料の提供を受けたので、厚くお礼を申上げる。

1. 三好學編『授業日誌』下に就いて

この『授業日誌』の上は、平成5年10月、岐阜県岩村町教育委員会から解説付きで復刻出版され、⁽¹⁾ 明治初年の小学校教育の内容研究の第一級資料として、専門学究から高い評価を受けている。⁽²⁾

この日誌が上下二冊に分けられ、上には第一号から第廿号まで、下には第廿一号から第卅一号までが収められていることは、上の「緒言」で判かっていた。私の手許にあった日誌の上は、伯母の津田百合江(學の長女)から渡されたもので、下は失なわれてしまったものと思っていた。ところが従弟の三好進氏から電話があり、問題の『授業日誌』下が物置の荷物の中から出てきたとのことで、早速届けてもらった。思いがけないこの発見で、下も復刻出版して、上下巻のセットにしたいとの岩村町の水野先生のお話がある。この事もあり、こゝでは『授業日誌』下の紹介にとゞめる。上の原本は復刻版刊行を機に岩村町に寄附し、現在は同町の資料館に収蔵、展示されている。なお、この復刻版は本学図書館に寄贈してある。

『授業日誌』下は上と同様、半載の薄手の美濃紙に朱罫をほどこしたものを半折し、洋風の製本をしたもので、背皮を使うなど当時としては随分モダンなものである。日誌のサイズ、製本の仕様は上と同様。全472丁なので、丁数は上よりかなり少ない。前述の通り第21号から31号までと附録より成り、コピイに見るように、毛筆で極めて丁寧に記述され

ている(図1)。

次に内容の見出しのみを拾ってみる。

第21号	明治13年	5月6日	木曜日
第22号	同	5月24日	月曜日
第23号	同	6月7日	日曜日
第24号	同	6月18日	金曜日
第25号	同	7月8日	木曜日
第26号	同	7月19日	月曜日
第27号	同	7月26日	日曜日
第28号	同	8月14日	土曜日
第29号	同	9月30日	木曜日
第30号	同	10月22日	金曜日
第31号	同	12月5日	日曜日

教育授業日誌附録

修身学教授論

欄外に「本論ハ昨十三年八月文部卿ヨリ諮問セラレシ教育四大要ノ一ナリ今乃頗ル増加スルトコロアリ」と記されている。内容は次の通りである。

甲 修身授業ノ法

乙 修身実施ノ法

其一 教師生徒ノ交際

其二 生徒朋友ノ交際

其三 父母兄弟姉妹ノ交際

小学校教員心得

これも初ページの欄外に「此ノ一編ハ我文部卿ヨリ布達セラレシモノニシテ誠ニ小学校ノ教育ヲ擔當スルモノ、金科玉條ト謂フベシ仍テ此ニ全文ヲ登録ス」と記されており、布達は明治14年6月になっている。最終ページにも欄外に附記があるが、これに就いては後に述べる。

以上が『授業日誌』下の骨組みである。こゝで重要なのは附録の「修身学教授論」で、時の文部卿福岡孝弟の諮問に三好が答えた原文に補足を加えたものであり、その頃の三好

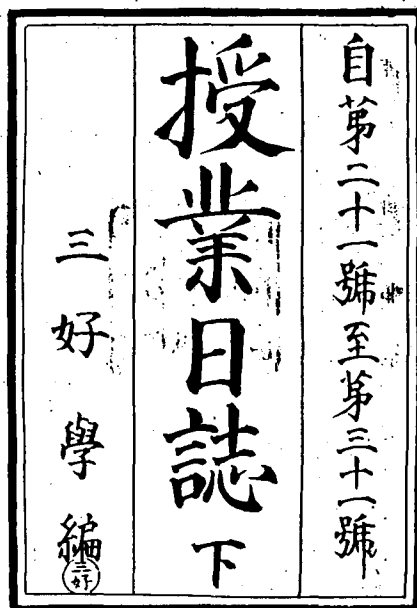
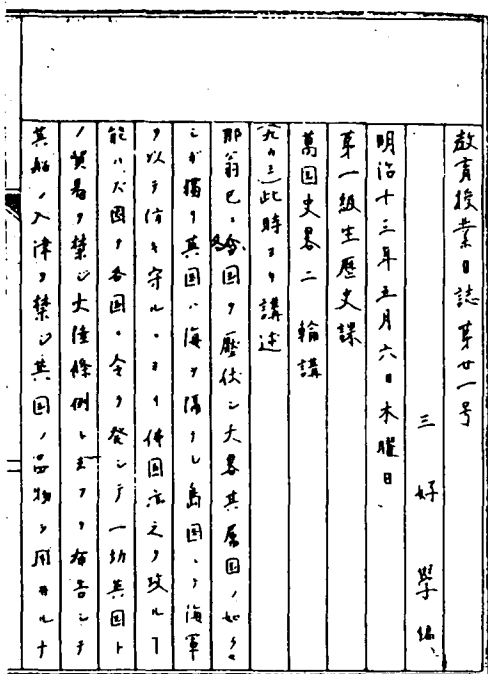


図1 三好學編『授業日誌』下の扉と第1ページ

の小学校校長としての修身学に対す考えと教授の方法が示されているので、全文のコピー

を添えた(図2)。さらに「小学校教員心得」の最終ページ欄外に「以上一々熟読玩味スレ

<p>本館(昨十三年八月文部卿より)ニ重要ナル固ヨリ論ヲ待シタル抑之ヲ授クルノ主善志ノルヤ深ク児童徳性ヲ養成シテ是非善惡ヲ識別セシム善良ノ習慣自其性トナリテ後來其線點ヲ誤ラザラシムルニテ而之ヲ教之ノ法分テ二トス曰ク教授上曰ク實施上是ナリ即チ甲ノ教場ニ在リテ教授スルモノニシテ乙ノ日常實施スル所ヲ云フ蓋甲ニ於テ其法ヲ傳習シ乙ニ於テ之ヲ實施スルモノトス乙ヲ逐次之ヲ説カシ</p> <p>甲 修身教授上ノ法</p> <p>教授ノ法ニテリ、即口授ト讀本ナリ口授ハ口ツカラ談話シテ授クルモノニシテ、幼年生徒ニ教フルノ法ナリ、故ニ其説クトコロノモノ、年近簡單ニシテ、聲論ヲ取り當言ヲ以テシ、幼生ノ了解シ易ク、樂テ之ヲ聞カシメンコトヲ要ス生徒學級漸ク進ム、談話モ亦隨テ高尚ニ及ブベシ、凡此際ニ於テ教フル所ハ、善惡邪正ノ別、勤怠得失ノ理、之ヲ伊曾布物語、童蒙教草、勸懲雜話等ノ書ヨリ取ル、而シテ授クルヤ、毎日道一ノ時ヲ以テ、尚水曜日或ハ土曜日ニ於テ、全室ノ生徒ヲ集メテ口授スルモノトス、</p>	<p>教育授業日誌附録</p> <p>三好 學編</p> <p>修身學教授論</p> <p>小學ノ教育ハ修身ヲ以テ本トス、修身科ハ小學ニ重要ナル固ヨリ論ヲ待シタル抑之ヲ授クルノ主善志ノルヤ深ク児童徳性ヲ養成シテ是非善惡ヲ識別セシム善良ノ習慣自其性トナリテ後來其線點ヲ誤ラザラシムルニテ而之ヲ教之ノ法分テ二トス曰ク教授上曰ク實施上是ナリ即チ甲ノ教場ニ在リテ教授スルモノニシテ乙ノ日常實施スル所ヲ云フ蓋甲ニ於テ其法ヲ傳習シ乙ニ於テ之ヲ實施スルモノトス乙ヲ逐次之ヲ説カシ</p>
<p>乙 修身實施上ノ法</p> <p>前條ニ説ク所ノモノ、日常之ヲ實施スルニ非ザレバ、修身ハ口授又ハ書籍上ノモノトナリテ、重要ノ學科モ亦謂ユル言フベクシテ行フベカラザルノ空論ニ陥イルノ弊ヲ免レザルナリ、之ヲ實施スルノ法如何即日常ノ交際ニ在リ、今大別シテ其一ヲ教師生徒ノ交際、其二ヲ生徒朋友ノ交際、其三ヲ家庭父母姉妹兄弟ノ交際トス、蓋シ其一ニハ、教師ノ力、能ク之ヲ為サシムベキモ、其二至テハ、其主莫大ニ父母ニ在ルナリ、而レモ亦教師ノ勸力ヲ以テ之ニ及ホスコトヲ得ベシ、</p>	<p>讀本ハ修身ノ書ヲ讀マシメ、自ラ感悟セシムルモノナリ、故ニ歴史ヲモ讀得ルニ至ラバ當ニ之ヲ授クベシ、即孝行、友愛、信實、正直、忠義、廉潔、節ヲ奮、勉勵、強忍、耐、榮、明等ノ更ニ至レ、進、士トシテ、士人善行ノ事蹟ヲ讀マシメ、漸クシテ之レガ論理ヲ講ゼシムベシ、用書修身說約、修身讀本、修身訓蒙、小學修身訓、勸善訓、蒙等ナリ、其他ハ修身教授ノ用書トナスベキモノ、孝行ノサトシ、慈父ノ教、二葉ノ風、近世孝子傳、明治孝節錄、本朝列女傳、日記故事、小學内外苦勵、訓蒙教談、訓蒙二種口授要說、育英新編、西國立志心、篇女子修身訓等、各枚草、參考、供フルモノナリ、</p>

図2-1 教育授業日誌附録、修身学教授論(1)

<p>其一 教師生徒ノ交際</p> <p>一言ヲテ而シテ行ハザル、其弊是ヨリ甚シキハナシ故ニ其日々教授スル所ノ者、必自行ハザルベカラズ、其平常生徒ニ接スルヤ自身ヲ以テ模範トナシ、主トシテ言語ヲ正シ、但一言部語ヲ矯メ、自生徒ニ對スル能ク其應對ノ式ヲ示スベシ、又深ク動作ニ著目注シ、急遽軽率ヲ慎ミ、毎々泰然トシテ、軀軀ヲ正直ニスベシ、妄ニ怒ヲ形ハスナク、鎮重大度ノ性ヲ養ヒ、而シテ温厚深妙ノ情ヲ以テ勉強忍耐ノ力ヲ保チ、機ニ乘シ事ニ就キ、勸懲訓諭、自然ノ良風ニ薫陶セシムベシ、</p>	<p>其二 生徒勿友ノ交際</p> <p>朋友ハ第一ノ教師ニシテ、智慧性實共ニ感化スルモノナリ、故ニ平生應對ノ言語、揖讓ノ礼節、之ヲ正シクシ、親切篤實ノ交情、難苦救済ノ實意、之ヲ深クシ、書中讀ム所古人ノ善行ヲ模倣セシムベシ、抑々勿友ノ交際、真ニ其道ヲ得テ善良ナル所ハ、其教有ニ益アルハ、少シ非ザルナリ、而シテ交際ノ正長ナラシメント欲セバ、先其(一)勉ムベシ、是教師生徒ノ交際、既ニ其道ヲ履マバ、生徒勿友ノ交際、自感化スルモノナレバナリ、</p> <p>其三 父母兄弟姊妹ノ交際</p> <p>家庭交際ノ緊要ナル、當々論ヲ待タズ、何トナレバ其學校ニ在リテ教授感化セラレタルモノ、タニ家庭ニ</p>
<p>歸リテ其父母兄弟姊妹ノ氣風如何ニ化シテ爲シ、消滅セラレバナリ、蓋其學校ニ在リノ間ハ、僅少ニシテ家庭ニ在ルハ多ク、故ニ之レガ感化ヲ受クルモノ亦理ナシトセズ、然ラバ、如何シテ可ナラン、抑セバ、ガ子ヲ監督スルハ、方ニ父兄ノ責任ナリ、故ニ今此ノ教ヲ施サント欲セバ、定トシテ父兄ニ責メ、ナルベカラズ、夫父兄タルモノ、苟クモ己レガ親愛ノ子ヲ教育セント欲セバ、則自其爲ス所ヲ省ミ、我思詐冒ノ心、怠惰鄙陋ノ行ヲ慎ミ、事毎々忠信節義ヲ示スベシ、是ヲ以テ父タルモノハ、尊嚴ノ格ヲ備ヘ、母タルモノハ、慈愛ノ風ヲ有シ、兄弟ハ之ヲ撫シ、兄弟ハ之ニ順ナラシメ、衣食殿起(言語動作共ニ揖讓)</p>	<p>整正ヲ奉トシ、以テ子弟ヲ養育シ、其學志ヲ獎勵セバ、其功亦遠ニ學校ニ優ルモノアラハ、縱令ニ能ク此ノ如クナラザルモ、父兄タルモノ、能ク不正ノ言語鄙陋ノ行狀ヲ慎マザル可ラズ、夫レ幼兒ノ最モ染ミ易キモノ、不正ノ言語鄙陋ノ行狀ヨリ甚シキハ、重大シ、之ヲ矯ルモノ、豈父兄タルモノ、急務ナラスヤ、是ヲ以テ父兄ヲレテ能ク此点ニ注意セシメント欲セバ、須テ修身教育ノ重要ナルヲ知ラシムベシ、其法一週中適宜ノ時間、或ハ閑宵ヲ約レテ、校舎ニ來テシメ、懇々説諭スベキニ、誰レガ愛子ノ爲メニ益スルコトヲ喜バザルモノ、テラシ、其子益進マバ、父母ノ喜亦益カハルベキナリ、</p>

図 2 - 2 教育授業日誌附録、修身学教授論(2)

<p>教師亦能ク兒童ニ告ゲテ曰ク汝家ニ歸ラバ汝ノ 両親兄弟ニ礼シテ今日ノ課業ヲ語ゲ必復習シテ 忘ルコトナク又能ク父母ノ命ニ從ヒ兄長ノ意ニ背カ ズ朝夕父母兄長ノ安否ヲ問ヒ礼讓ヲ正シ自家 ヲ以テ學校ノ如ク父母ヲ以テ教師ノ如ク兄弟ヲ 以テ朋友ノ如ク思フベシ又訓ヘテ曰ク汝自汝ノ身 貴重ナルヲ知リ輕年鄙腹ノ行ヲナサズ欺詐虚 亡安ノ言ヲ吐クコト勿レ汝ガ務トスル所ハ唯能ク父兄 ニ事ヘ教師ニ學ビ朋友ニ交ルニテリ必記シテ忘 ルコト勿レト此ノ如ク父兄ニ注意セシメ兒童ニ教 戒シ時々獎勵勸懲セバ家庭教育ノ道即父母 兄弟ノ交際成裁ノ善良ニ趣クベケン</p>	<p>右ニ述ブル所ハ是教授上及ビ實施上ノ方法ナリ 此法ニ因テ而シテ之ヲ模ケ生徒善惡ノ行為判 然トシテ見ハレバ則以テ賞罰ノ法ヲ施シ之ヲ シテ勸懲スルトコロアラシムベシ其法行狀簿ヲ製 シ各生ノ善惡ヲ日誌スベシ其式様左ノ如シ 一五 点 善 品行善良ナル者 一四 点 善 品行正シキ者 一三 点 善 品行中庸ナル者 一二 点 善 言語動作正シカラザル者 一一 点 善 品行輕率粗暴ナル者 一〇 点 善 品行不正ナル者 〇 点 善 品行不正ナル者 〇 点 善 品行不正ナル者 シルモノトス (了)</p>
---	--

図2-3 教育授業日誌附録、修身学教授論(3)

バ教員タルモノ其責ノ大且重ナル宜ク此ノ如ク為サズンバアル可カラザルヲ知ルベシ予ノ如キ天資不肖此諸欵ニ背ク多シト雖独勉強ノ二字ニ於テハ常ニ体認シテ忘レザル所ナリ」と感慨を述べている。三好のこの信条は帝国大学教授となった後も変ることなく、研究に教育に、天然物保存の啓蒙活動に、終生貫かれていた。

2. 三好の論文、論説などに就いて

三好が書き残した著書、論文、論説、報文、隨筆などの総ページ数は2~3万ページに達するのではないと思われる。その内の著書に就いては本研究紀要第10号に完全なものではないがリストを載せた。(3) また、雑誌『史跡名勝天然記念物』に掲載されたもの、リストは同第12号に、雑誌『桜』に載ったもの、リストも同じ号に収めた。(4)

三好は1936年『植物学雑誌』第50巻、580号の中に「Autobiographie」を書いている。(5) この自伝の全訳は後に示すが、その末尾に自著の主なもの、リストを付けている。これが一応スタンダードとなるのだが、研究面が中心である。それ以外に書かれたものに就いては、発表された雑誌や刊行物が極めて多岐に亘っており、探索が容易でない。

ここではまず、三好自からが長く会長職に在った日本植物学会の機関紙『植物学雑誌』と明治、大正時代を代表する総合学術雑誌である『東洋学芸雑誌』に掲載された分をリスト・アップした。このリスト自体も完全とは言えず、本研究紀要第11号の三好の天然記念物関係の著述目録(6)とも重複があるが、将来の利用の便を考慮し、改めて雑誌別のリストに纏めた。

A. 『植物学雑誌』掲載分

本誌は明治20年(1882)の創巻であり、東

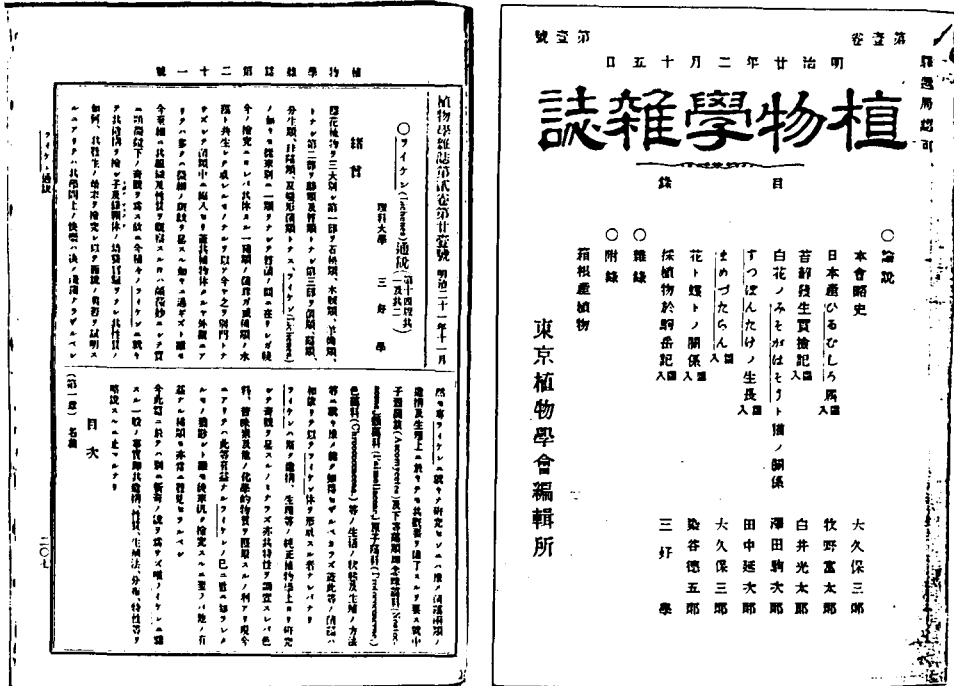


図3-1 「植物学雑誌」創巻号表紙(右)三好と牧野富太郎の名がある。ライケン通説(左) (第1回目、明治21年11月、第2巻第21号)

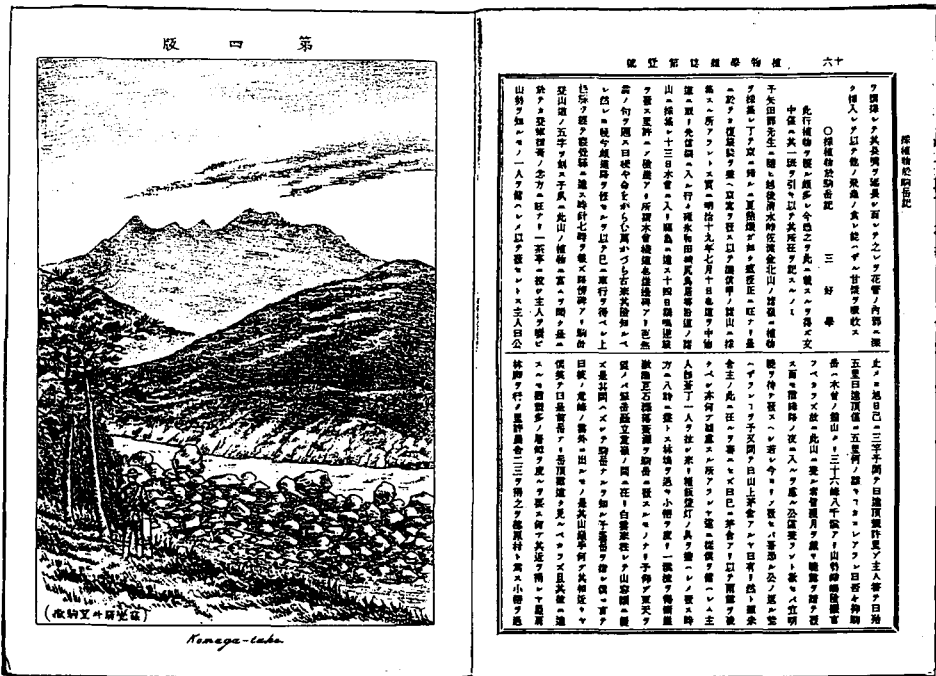


図3-2 「植物学雑誌」第1巻第1号の三好の「採植物於駒岳記」の第1頁(右)、寝覚◎外望駒岳と題するスケッチが添えられている(左)

京植物学会（後の日本植物学会）より刊行された。この年、三好は帝国大学理科大学動植物学科の二年生であった。第1巻第1号に三好の「採植物於駒岳」が載っているので、表紙、報文第1ページ、三好の手による駒ヶ岳

のスケッチを示しておく(図3)。因にこの雑誌は平成6年(1994)12月、第107巻1088号に達している。

次のリストの中の(雑)は雑記、(新)は新著紹介または書評である。

巻号	発行年月	論 題	頁	図 版	備 考
1-1	明治20.1	採植物於駒岳	16-21	1(第4版)	創巻号 駒岳スケッチ
1-3	20.4	はくせんなずなノ説	60-61	1(第7版)	理科大学学生
1-4	20.5	花 説	82-86	3(第9~11版)	理科大学
1-6	20.7	日本産石松属(Lycopodium)植物ヲ拳ゲ併セテ其造構組織、一般ニ及ブ	113-118	1(第14版)	同
1-7	20.8	同(前号ノ続)	133-137	2(第15、16版)	同
1-10	20.11	伊勢紀伊植物採集紀行(附図)	190-205	2(第22、23版)	和紙折込み、 紀伊半島地図
1-11	20.12	紀州植物採集目録(図入)	211-246	2(第24、25版)	理科大学
2-13	21.3	冬蟲夏草ノ辯	36-40		同
2-15	21.5	こものぎく(新稱)	71-72	1(第5版)	同
2-20	21.10	ながさきしだ(新稱)(図入)	189-192	1(第12版)	
"	"	富士山植物採集ノ形況	192-199		同
2-30	22.7	植物和名義例(雑)	298-301		同
"	"	植物羅匈名ノ読方(雑)	301-303		同
3-32	22.9	新出羊齒くらがりしだ	351-353	1(第13版)	理学士
"	"	美濃国東部ノ植物(雑)	382		
4-38	23.4	桑樹ニ着生スル地衣植物ニ就テ	123-125	1(第4版図入)	
"	"	信州御嶽ニテ地衣植物採集ノ記	135-140	1(図1葉)	垂直分布・地形
"	"	新刊ノ隠花植物書ヲ読ム(新)	144-147		
"	"	大葉地衣(雑)	155		
4-41	23.11	さぎごけノ香気(雑)	268		
"	"	くらがりしだノ新産地(雑)	268		
4-43	23.9	Notes on <i>Pinguicula ramosa</i> , (1890) sp.nov.	315-316	1(Pl.×1)	

卷号	発行年月	論 題	頁	図 版	備 考
4-43	23. 9	<i>Pinguicula ramosa</i> ニ就テ	316-319	1 (第11版図)	
"	"	信州両毛植物採集旅行雑記	325-327		
4-44	23.10	同 (前号ノ続)	371-374		
"	"	上州地方ノ地衣ニ就テ	375-376		
4-45	23.11	地衣雑説	404-406		
4-46	23.12	食用地衣の説	441-444		
5-47		博物学ノ研究ヲ諸君ニ勸カム	18-27		[横組みになる]
5-48	24. 2	日光山中ノ地衣植物	48-50		
5-49	24. 3	信州戸隠山採集植物目録	85-89		
"	"	<i>Lycopodium</i> ノ孢子ノ萌発	89-90		
5-51	24. 5	Eine essbare japanische Flechte	152-153		
"	"	秩父諸峯及ビ筑波山植物採集略 記 (図入)	153-156	1 (筑波山)	
"	"	秩父及ビ筑波山採集植物目録 (地衣ノ部ヲ除ク)	156-158		
5-52	24.6	新稱日本地衣	197-200		
76		新著ノ「レフェラート」	171-174		在獨逸
9-101	28.7	菌絲ノ膜質貫透ニ就テノ研究略報	243-245		
9-102		獨国植物学研究生要領 (雑)	315-316		
9-103		獨国植物学会総会 (雑)	348		
"		植物学上新刊雑誌 (雑)	348		
"		コレブオン氏高山植物試植園(雑)	348		
"		故プリングスハイム氏ノ遺稿(雑)	349		
"		ケルナー、フォン、マリラウン氏(雑)	349		
"		海藻学者リヒテル氏ノ新水藻(雑)	350		
"		商陸科植物解剖上ノ研究 (雑)	350		
9-104	28.10	醤油液ヲ菌類培養基ニ用フル実験	361-365		
10-107	29. 1	“Saké-no-Kasu” als Nährboden (1896) für Pilzkultur.(菌類酒粕培養基、1)	119-132		
10-111	29. 5	地衣学者ドクトル、ミュラー氏 没ス (雑)	168-170		
10-112	29. 6	Physiologische Studien über (1896) Ciliaten (纖毛類ノ生理学的研 究ニ就テ、摘要)	184-188		

卷号	発行年月	論 題	頁	図 版	備 考
10-118	29.12	平瀬氏ノ『公孫樹ノ精虫』ニ就テ	409-411		
11-126	30. 8	日本鉱泉ノ生態学的研究略報	285-290		
128	30.10	生物ト其周圍トノ關係	363-370		
12-132	31. 2	開花ヲ促シ花色ヲ変ズル方法ニ 就テ	35-43		
133	31. 2	同	77-82		
13-153	32.11	Botanische Mittheilungen aus (1899) Nikko I	123-128		
153		故ニーランデル氏 (雑)	341-342		
153		日本農作物害虫篇 (新)	347		
18-210	37. 7	フェッフアー教授著『植物生理学』 第二版ノ完成ヲ報ジ併セテ植物 生理学書ノ古来ノ変遷ヲ叙ス	117-125		(明37.7.10)
212	37. 9	モーリシ氏『発光植物』(新著)	199-203		
21-241	40. 2	名木ノ伐滅並ニ其ノ保存必要	36-43		東洋学芸雑誌 第301号ヨリ 転載
22-253	41. 2	熱帯植物葉ノ特性	69-73		
254	41. 3	同 (承前)	103-107		
24-279	43. 4	普通ノかび (絲状菌) ノ和名ト 該菌類ノ生態ニ就テ (雑)	101-105		
287	43.12	たがやさんトハ何ゾヤ	361-364		
25-289		トレーブ教授ヲ想フ	37-41		
290	44. 3	日本ノ天然紀念物ノ保存ニ就テ	75-84		(明43.12.1稿)
26-309	大正元. 9	ひかりごけノ培養	275-277		
310	元.10	Ueber die Kultur der <i>Schisto-</i> (1912) <i>stega osmundacea</i> Schimp	304-306		
312	元.12	Ueber <i>Deutzia crenata</i> Th. (1912) <i>var. plena</i> Max.	347-350		
28-335	3.11	欧米ノ天然紀念物保護ト天然保 護区域ニ就テ	464-471		
29-340	4. 4	日本ニ於ケル光藻ノ発見ニ就テ	123-125		
341	4. 5	Ueber das Leuchtwasser und (1915) dessen Schutz in Japan	51-53		

卷号	発行年月	論 題	頁	図 版	備 考
346	4.10 (1915)	Ueber die Ausflussmenge des Blutungssftes bei <i>Carpinus yedoensis</i> Matsum.	211-215		(Tokyo, Juli 1915)
30-358	5.10 (1916)	Der Riesenkirschbaum von Ishido	321-324		写真一葉
33-393	8.9 (1916)	Über die Erhaltung einer neuen, wildwachsenden, hängenden Varietät des Kastanienbaumes als Naturdenkmal	185-188		写真一葉
34-398	9.2	クロレラ <u>ブルガリスニ</u> 由レル光水	50-53		
407	9.11 (1920)	Untersuchungen über japanische Kirschen I	159-177	4 図版	
408	9.12 (1920)	Weitere Mitteilungen über die Hängekastanie	185-186		
36-421	11.1 (1922)	Untersuchungen über japanische Kirschen II	1-14		
39-465	14.9 (1925)	Bericht über die neuerdings gesetzlich geschützten totanischen Naturdenkmäler	235-238		
41-483	昭和2.3 (1927)	Some Remarkable Instances of Improvement of Flower Characters in Cultivated Cherries	123		
42-504	3.12 (1928)	Untersuchungen über japanische Kirschen III	545-552		
541	7.1	Molisch, H. Botanische Versuche ohne Apparate, 1931(新)	31		
541	7.1	栗原基 ルーサー・バーバンク(新)	31		
46-544	7.4	回顧雑談 会長三好學	264-265		(昭6.11.23)
47-554	8.2 (1933)	On the Disjunctive Plant Distribution in the Pacific Regions from the Nature Protection of View	85-88		

卷号	発行年月	論 題	頁	図 版	備 考
49-588	10.12	Warming 氏 並ニ Schimper 氏 ノ植物地理学ノ標準的著述ニ就 イテ(雑)	899-901		(昭10.10.30)
50-589	11. 1 (1935)	Autobiographie von Manab Miyoshi (雑)	40-45		写真1(Tokyo, Dez. 1935)
	"	Verzeichnis der Druck- (") schriften von Manab Miyoshi bis Botanische Arbaiten in deutscher oder englischer Sprache (雑)	46-48		
50-591	11. 2	Fitting 氏、Sierp 氏、Harder 氏、Karsten 氏共著大学用植物 学教科書第19版ニ就イテ(雑)	159-160		(昭11.2.23)
51-602	12. 2	長者ケ丸桜譜ト草木奇品家雅見 図2葉(雑)	64-69		
605	12. 5 (1937)	Über den Einfluss der äusser- en Faktoren auf die Grösse und Farbe der Kirschblüten	210-211	2 図版	
609	12. 9	モーリシ教授ノ初ノ日本訪問ニ 就イテ(雑)	771		(昭12.8.31)

第2巻20号(明治21年11月)より第4巻40号まで「ライケン (Lichenes) 通説」を20回連載している(図3)。これに就いては別表とした。

2 卷21号	明治21.11	<u>ライケン</u> (Lichenes) 通説	207-212頁	(第14版其1及其2)	理科大学
22	21.12	同 (前号ノ続)	247-251		"
3-23	22. 1	同 (")	21-24		"
24	22. 2	同 (")	56-58		"
25	22. 3	同 (")	99-100		"
26	22. 4	同 (")	(第2巻第14版図ヲ参考スベシ)	128-131	"
27	22. 5	同 (")	174-176		"
28	22. 6	同 (")	215-217		"
29	22. 7	同 (")	(此節完)	257-258	"
30	22. 8	同 (")	(此節未完)	293-295	理学士

31	22.9	同	(") (第2巻第14版図ヲ参考セヨ)		"
			(此章完)	327-329	理学士
32	22.10	同	(")	359-363	"
33	22.11	同	(")	407-410	"
34	22.12	同	(")	434-437	"
4-35	23.1	同	(") (図2葉)	25-26	"
36	23.2	同	(")	59-62	"
37	23.3	同	(")	91-93	"
38	23.4	同	(")	142-144	"
39	23.5	同	(") (此章未完)	187-190	"
40	23.6	同	(")	213-215	理科大学植物学教室ニ於テ三好学識ス

以上の他に欧米の新著や論文の紹介や抄録を極めて多数載せている。しかし、三好の直接の業績でないことと余りにも煩瑣なので、今回はほとんど割愛した。

B. 『東洋学芸雑誌』掲載分

先に述べたように『東洋学芸雑誌』は、明治・大正期を通じての日本の総合学術雑誌を代表するもので、創巻号(第1巻1号)は明治14年10月の刊行である。それより大正11年3月の第39巻486号まで続き、東洋学芸社が出版元であった。大正11年4月の第39巻487号か

ら誌名を『学芸』と改め、同12年9月の第40巻504号まで同社から刊行されたが、関東大震災のため廃刊になっている。しかし、大正14年5月から再び『東洋学芸雑誌』のタイトルで復刊、第41巻505号が出され、昭和5年12月の第46巻8号で、長い歴史を閉じている。以上の『東洋学芸雑誌』の変遷については、岡部氏のご教示によるものである。明治22年の第6巻95号のものは三好が帝国大学を卒業した年のものである(図4)。リスト中の(応)は質問に対する応問である。

巻号	発行年月	論	題	頁
6-95	明治22.8	「磐梯ノ木苔」(応)	(図入、1-4)	437-438
7-104	23.5	幼根ノ意義ニ就テ	(応)	284
"	"	「鱗色ニ就テ」	(応)	285
106	23.7	隠花植物ノ話	(東京英和学校ニテ講談)	374-386
109	23.10	「三好學先生ノ隠花植物ノ話ニ付テ」	答ヘル	(応) 584
8-113	24.2	動物カ將タ植物乎	(図入、明治23.11.20東京英和ニテ講演、大学院)	85-93
12-166	28.7	高山植物帯研究ニ就テ		344-346
169	28.10	フェッファー氏、植物養分撰擇ニ関スル新研究		483-487

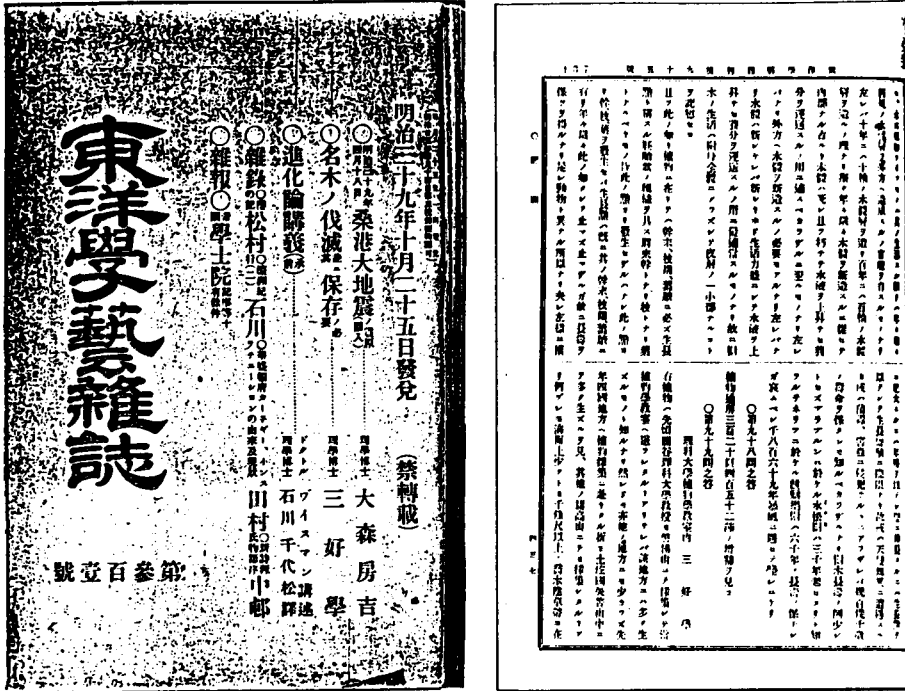


図4 「東洋学芸雑誌」第301号表紙(左)、三好の「名木伐減並に其ノ保存ノ必要」が載っている(明治39年10月25日)、(右)植物に就いての間に対する「応答」の最初のもの(第95号、明治22年8月25日)

巻号	発行年月	論 題	頁
170	28.11	植物生理学大家プリングスハイム氏小伝	533-537
13-174	29.3	下等生物ニ於ケル生理学的最近研究結果ニ就テ(明治29.3—高生物会ニテ演説)	119-132
182	29.11	「紅葉ニ就テ」(応)	554
	〃	「果実ニ就イテ」(応)	554
183	29.12	硫黄「バクテリア」ノ話(同29.10.24夜、大学通俗講談会ニテ演説)	575-586
14-184	30.1	「葉ノ白斑」ニ就テ答ヘル	46
191	30.8	植物生理学ニ於ケル最近の進歩	347-356
193	30.10	植物生理学大家サックス氏ヲ追想ス	423-431
15-199	31.4	菌類ハ如何ニシテ生物体ニ浸入スルヤ	145-153
200	31.5	培養上あさノ雌雄両性分別ニ関スル実験	252-254
203	31.8	かび(糸状菌)ノ培養並ニ実験	356-364
204	31.9	植物学大家コーン、ケルネン両氏略伝	403-407
16-210	32.3	植物体ヨリ液汁排出ノ顕象	91-95

巻号	発行年月	論 題	頁
218	32.11	物質維環上「バクテリア」ノ作用	441-451
17-225	33.6	植物生理簡易実験法(第1)	247-253
18-233	34.2	生活植物体内ノ結氷	72-77
238	34.7	地衣植物ノ生態	265-269
248	35.5	植物ノ生態	189-193
20-258	36.3	花色変換法	93-104
21-270	37.3	植物の新種形成の問題(明治37.2.19東京帝大講談会にて演説)	111-119
271	37.4	同	178-184
22-283	38.4	植物の成長並に発生(大日本気象学会總會ニ於テ演説)	147-161
23-301	39.10	名木ノ伐減並ニ其保存ノ必要	429-438
25-319	41.4	印度ダーチリンの植物景觀	150-158
325	41.10	熱帯の紅葉	223-227
26-336	42.9	トレーブ教授トボイテンゾルグ植物園	423-426
28-357	44.6	日本ニ於ケル天然紀念物保存思想ノ發達	253-259
29-368	45.5	公孫樹ト蘇鉄ノ精虫ニ就テ	211-216
31-394	大正3.7	欧米各国ニ於ケル天然紀念物ノ保存	297-305
395	3.8	同	348-357
33-412	5.1	外国ニ於ケル朝鮮人参ノ藥効一斑	15-24
413	5.2	同	89-100
34-430	6.7	植物觀察 大東岬の一日	421-430
35-439	7.4	国華	214-217
36-451	8.4	市橋長昭撰花譜解題ト其文献的価値	202-211
452	8.5	同	267-273
36-455	8.8	桜草原野ノ保存ノ必要	452-457
37-470	9.11	天然紀念物保存が学問上に及ぼす効果に就て	494-502
『学芸』			
39-487	11.4	櫻の变化性	4-13
489	11.5	花菖蒲の变化性	6-12
491	11.8	海浜植物の生態	6-15
40-496	12.1	植物生態生理学の目的	12-27
499	12.4	珍しい櫻	2-15
502	12.10	十和田湖の植物景觀	2-4

卷号	発行年月	論 題	頁
『東洋学芸雑誌』(復刊)			
41-505	大正14. 5	植物学上より観たる天然紀念物保存 (1)	45-56
506	14. 6	同 (2)	145-162
42-514	15. 2	松岡恕庵と品種の研究	22-32
43-525	昭和2. 1	天紀念物保存と植物生態学	23-24

C. 教育関係のものに就いて
 三好は小中学生向けにも植物や天然物保護の平易な文章を書いている。帝国大学教授が少年達のために筆を執ること自体、大層珍しいことであるが、小学校教師の経験のある三好であるだけに肯定出来るものがある。次に掲げるリストは新井氏のご好意によるものである。

掲載誌	卷号	発行所	発行年月	論 題	備 考
『少年園』	23号	少年園	明治22.10	榕樹の説	
『 " 』	28号	少年園	22.12	冬日の植物学	
『 " 』	30号	少年園	23. 1	日本産の特異なる植物	
『 " 』	31号	少年園	23. 2	日本産の特異なる植物	
『 " 』	40号	少年園	23. 6	高山登躋の壯観及び利益	
『 " 』	48号	少年園	23.10	スタンレー氏熱帯亜弗利加森林記事ノ一節	
『 " 』	54号	少年園	明治24. 1	山登りの話	
『 " 』	55号	少年園	明治24. 2	山登りの話	
『 " 』	56号	少年園	明治24. 2	山登リノ話。第三	
『教育時論』第456号		開 発 社	明治30 (1897) 年12月	生物と其周囲との関係	
『教育界』第1巻 第3号		金 港 堂	明治35 (1902) 年1月	培養植物の話	
『教育界』第3巻 第1号		金 港 堂	明治36年 (1903) 年11月	日本の植物学	
『中学世界』第8巻 第6号		博 文 館	明治38 (1905) 年5月	顕微鏡の話	
『少年世界』第11巻 第9号		博 文 館	明治38年7月	蓮の話	
『中学世界』第8巻 第13号		博 文 館	明治38年10月	紅葉の話	

掲載誌	巻号	発行所	発行年月	論 題	備 考
『中学世界』	第9巻 第1号	博文館	明治39(1906)年1月	植物体に於ける氷雪の影響	
『少年世界』	第12巻 第1号	博文館	明治39年1月	梅の生態	
『少年世界』	第12巻 第2号	博文館	明治39年2月	梅の生態	
『少年世界』	第12巻 第4号	博文館	明治39年3月	少年と植物	談話を収録
『中学世界』	第9巻 第7号	博文館	明治39年6月	植物と降雨	
『中学世界』	第9巻 第8号	博文館	明治39年6月	植物学	
『少年世界』	第12巻 第8号	博文館	明治39年6月	花菖蒲	
『少年世界』	第13巻 第1号	博文館	明治40(1907)年 1月	氷上の植物	
『中学世界』	第12巻 第6号	博文館	明治42(1909)年5月	植物の利用と改良	
『中学世界』	第12巻 第8号	博文館	明治42年6月	植物学上の観察	
『少年世界』	第16巻 第2号	博文館	明治43(1910)年1月	南洋の楽園	
『内外教育評論』	第4巻第1号	内外評論社	明治43年4月	受験者の欠点と研究上の注意	文検受験者への解説
『中学世界』	第13巻 第7号	博文館	明治43年6月	若葉の観察	
『中学世界』	第13巻 第9号	博文館	明治43年7月	樹葉の観察	
『中学世界』	第14巻 第1号	博文館	明治43年12月	植物の適応性	
『中学世界』	第14巻 第2号	博文館	明治44(1911)年1月	植物の人為適応	
『小学校』	第13巻 第1号	同文館	明治45(1912)年4月	資料 桜	

掲載誌	巻号	発行所	発行年月	論 題	備 考
『中学世界』	第15巻 第8号	博文館	明治45年6月	熱帯の大植物園	
『少年世界』	第19巻 第1号	博文館	大正2(1913)年1月	自然を愛せよ	
『教育実験界』	第34巻第12号	育成会	大正3(1914)年12月	天然保護と普通教育	
『小学校』	第19巻 第1号	同文館	大正4(1915)年4月	吉野の桜と其保存	
『国語教育』	第1巻 第2号	育英書院	大正5(1916)年1月	天然記念物について	高等小学 読本巻三第一八課解説
『少年世界』	第22巻 第2号	博文館	大正5年2月	新しい科学の世の為	
『教育画報』	第2巻 第2号	同文館	大正5年4月	日本の桜	
『教育時論』	第1149号	開発社	大正6(1917)年1月	普通教育と天然記念物保 存	
『教育画報』	第3巻 第8号	同文館	大正6年2月	日本の天然記念物と其の 保存	
『教育画報』	第4巻 第2号	同文館	大正6年4月	吉野山の桜	
『大学及大学生』	第10号	進文館	大正7(1918)年8月	人生植物学に就て	
『教育時論』	第1213号	開発社	大正7年12月	桜の良種を植ゑよ	
『教育画報』	第9巻 第4号	同文館	大正8(1919)年12月	メンデルの略伝と遺蹟	
『中学世界』	第23巻 第15号	博文館	大正9(1920)年12月	信州岩村田の光蘇	
『教育画報』	第12巻 第3号	同文館	大正10(1921)年5月	天然記念物としての花の 木	
『教育画報』	第12巻 第4号	同文館	大正10年6月	天然記念物としての青島	
『教育画報』	第13巻 第2号	同文館	大正10年10月	美松の話	

『教育画報』第17巻 同文館 大正13(1924)年3月 大東岬の海浜植物群落
第4号

以上のリストは三好の論文、論説が集中している2雑誌と一般の教育関係のものから選んだが、この他の論説、報文、随想文などのリスト・アップは次の機会に譲ることにした。なお、東アジアの植物学の文献目録『A Bibliography of Eastern Asiatic Botany: Merrill, E.D. & E.H. Walker (1937)』pp. 327-329とその補遺『Supplement 1: E.H. Walker (1960)』p. 232に三好の業績リストが収載されており、伊藤先生からコピーを頂いた。『植物学雑誌』以外のものがかなり含まれているが、ここでは割愛する。

3. 三好の「自伝」に就いて

三好は『植物学雑誌』の第50巻580号(昭和11年)に独文の「自伝」を書いているが、これは三好が没した昭和14年の3年前になる。三好はこの「自伝」の前に、同じ雑誌に「回顧雑談」(第46巻544号)を載せており、彼の履歴書が東京大学理学部植物学教室に保管されている。三好の門人の渡辺清彦博士が『三好學伝』(昭和16年)を著わしておられるが、勿論この「自伝」が骨子になっており、門弟

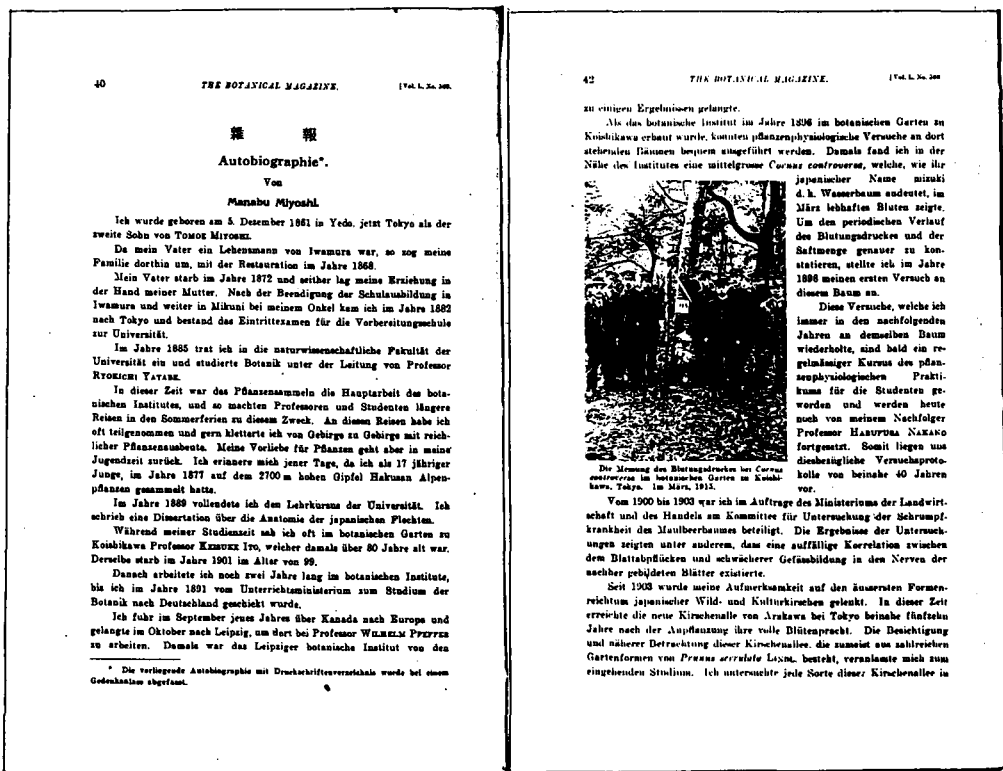


図5 三好の「Autobiographie(1936)」の第1頁(左)、(右)みづきの根圧実験の写真がある第3頁目



図6 三好學と家族(上左)母とよ(豊子)明治43年8月(三好勝氏提供)、(上右)矢野文雄(昭和5年)、(下左)學 1913年ドイツにて(三好勝氏提供)、(下右)妻美津子と長女百合江、次女綾江(筆者の母)、明治32年3月18日、三好は37才、帝国大学教授、美津子は25才(三好進氏提供)

の方々が書かれた追憶、追想文なども同様である。

この「自伝」は三好の植物学者としての生涯を知る唯一のもので、ぜひ原文を全訳しておく必要がある。三好の書く文章は流麗ではあるが平易で、明治の前半に著した書物などでも読み易い。この為、戦前の中学校の国語の教科書に三好の植物に関する文章が採用されている。三好は青年時代、文学を愛好し⁽⁶⁾、

漢詩も多く残している⁽⁷⁾ほどで、科学者には珍しく文学的素養が深かった。

三好の書いた独文と英文は邦文の場合同様明快で、この「自伝」も僅かな校正ミスはあるものの日本人が書いたと思われぬ程見事なものである。文中の人名その他、必要と考えられる部分には註を付けた。

図5は「Autobiographie」のコピーである。三好學と妻美津子、母とよと岳父の矢野

文雄の写真も添えた(図6)。この項に関して和田博士から多くのご教示を頂いた。

「自伝」

三好 學

1861年12月5日、三好友衛⁰⁾の次男として江戸、現在の東京に生まれた。

1868年の大政奉還に伴い岩村藩士であった父は、家族と共に岩村に引き移る。

1872年に父が死亡、以後母¹⁾の訓育を受ける。岩村および伯父²⁾の居た三国における学校教育を経て、1882年東京に赴き、東京大学予備門に入学した。

1885年、東京大学理学部に入り、矢田部良吉³⁾教授のもとで植物学を学ぶ。

当時の植物学教室の主要課題は植物採集で、教授と学生はこの目的で夏期休暇には比較的長い採集旅行をした。余もしばしば参加し、好んで山岳地に登り、豊富な収穫を得た。余は少年時代より、植物を特に愛好し、1877年17才の折、標高2,700mの白山頂上で高山植物を採集した日が記憶に残っている。

1889年、帝国大学理科大学植物学科を卒業、学士論文は「日本産蘚苔植物の解剖」である。

学生時代には小石川の東京大学理学部附属植物園に於いて、当時80才を越した伊藤圭介⁴⁾教授にしばしばお目にかかった。同教授は1901年、99才で逝去された。

植物学教室に2年おり、1891年植物学修学、研究のため、文部省よりドイツに派遣された。

同年9月カナダを経てヨーロッパに渡り、10月ライプチヒ着、Wilhelm Pfeffer 教授⁵⁾に師事。当時のライプチヒ植物学研究所には多数の外国の植物学者がしばしば訪問し、植物生理学研究の魅力の中心地の観があった。

余の3年以上の滞在中に Stone、Correns、Chudjakow、Rothert、Jensen、Hasteen、Newcombe、Peirce、True、Lidforss、Czapek、Keeble、Ewart、Kosaroff 等がここを訪ね、研究に従事していた。当時のライプチヒ植物学研究所では、植物の刺激反応がお好みのテーマであった。

夏期休暇中にアルプス地方に旅行し、またドイツ及び他のヨーロッパ諸国の植物園及び植物学研究所を訪ねることは余の大きな喜びであった。当時の傑出した多くの植物学者— Julius von Sachs,⁶⁾ Nathanael Pringsheim、Ferdinand Cohn、Julius Wiesner、Anton Kerner von Marilaum、Joseph Dalton Hooker、Thomas Huxley,⁷⁾ Ernst Haeckel⁸⁾ 等— にお会いする機会があった。

1894年末、ライプチヒにおける修学の終る直前、ボイテンゾルクの Melchior Treub 教授より、帰路ジャワに立寄るよう招待を受けた。余は喜んでこれを受諾し、同地に赴くよう1895年2月9日にライプチヒを出発した。シンガポールで汽船に乗り換え、3月15日バタビア港、タンジョン・プリオクに上陸、ジャワの熱帯の自然を初めて眺め、その素晴らしい印象は忘れられない。

直ちにボイテンゾルク⁹⁾に向い、当時すでに植物学者のメッカであった豪華な植物園で若干の時間を過した。残念ながら短い滞在ではあったが、熱帯植物に関する興味ある観察が出来、Treub 教授の好意で自由に貴重な標本の採集も出来た。

1895年4月18日東京に帰着、まさに日清平和条約が調印される時であった。4月末に矢野文雄¹⁰⁾の娘美津¹¹⁾と結婚する。

同年5月、帝国大学植物学の教授となり、一般植物学の講義と植物生理学実習を開始。

7月に理学博士の学位を受ける。

同年及び次の年の夏には日光湯本の温泉に豊富に存在する硫黄細菌を研究した。余は特に71℃に達する温泉の熱湯の中で生きる、かくも奇妙な細菌のコロニーに興味をもった。日本の温泉にはこの様な硫黄細菌や他の細菌が存在するが、これに関しては、当時まだ全く知見がなく、余はこれに就き研究を進め、若干の結果を得た。

植物学教室は1896年小石川植物園内に建設され、それより園内の樹木の生理学的研究が具合よく出来るようになった。余は当時、教室の附近に中位の大きさのミズキ *Cornus controversa* を見付けた。このミズキと言う名前は、「水木」が暗示する通り、3月に活発な排水がみられる。この排水圧と樹液量の周期的変動を詳細に確認するため、1889年にこのミズキで最初の実験を行った。

この実験はその後、毎年同じミズキで繰り返して行われ、やがて学生の植物生理学実習の正規の課程となり、現在も余の後任の中野房治教授によって受けつがれている。この様に我々の研究室には、これに関するまさに40年に亘る実験記録が保存されている。

1900年から1903年まで、農林省及び商社の委託でクワの萎縮病の研究に関する委員会に参加した。この研究結果の中で特に言及せねばならぬのは、クワの葉の摘みとりと、その後で成長した葉の葉脈の虚弱な導管の形成との間に、明かな相関関係が認められることであった。

1903年以来、余は日本産の野生及び栽培型のサクラで、極めて形態が多様であることに注目した。その頃、東京近郊の荒川堤の新桜並木は、植付けからほぼ15年を経て、完全に花盛りの美しさに達していた。この並木はほ

とんどサトザクラ *Prunus serrulata* Lindl. の数多くの庭園型から成立しているが、これを眺め且つ近くで観察することが、余がこれを詳細に研究する動機になったのである。余はこのサクラ並木のあらゆる品種を形態的見地より研究し、また植物園で栽培実験を行った。

同時に日本産のシロヤマザクラ *Prunus mutabilis* Miyos. 及びベニヤマザクラ *Prunus sachalinensis* (Fr. Schmidt) Miyos. に関する研究を開始した。これらの種に於いても、数多くの形態的多様があり、この事を栽培実験によりさらに追求した。さらに日本産ハナショウブ *Iris ensata* Thunb., *Iris Kaempferi* Sieb. に興味をもち、これに就いての研究を1908年、堀切の最古の菖蒲園である小高園で始めた。花の連繫群の研究は多くの奇妙な異常型があることを明らかにした。

1907年、大学より学術旅行奨励金を受け、インド及びジャワに旅行。8月3日横浜発、シンガポール、ラングーンを経て同月29日カルカットへ到着。Sibpur 王立植物園では園長の A.T. Gage キャプテンの好意により、他の地では見たことのない葉の異常型について、興味ある観察が出来た。その後、熱帯及び温帯のヒマラヤ地域の風景とその熱帯植物相を観察するために、ダージリンに赴いた。

インド半島南部及びセイロンの旅行後、9月22日ジャワ着。該地では Treub 教授の再度の温かい待遇を受けた。また、興味ある熱帯樹の葉の形態と性状を調査した。10月11日ジャワを発ち、11月7日は横浜着。

当時余は日本に於ける自然保護の必要性を認めていた。これは日本はヨーロッパ及びアメリカ同様、工業の繁栄と土地の利用の結果、稀有な動植物、原始林、巨大な樹木、特異な

地層等が断えまなく絶滅、破壊されていたからである。1906年、余は先ず注目すべき樹木が危機に瀕していることを警告し、且その保存を提案することを目的として論文を発表した。

天然記念物の保護、管理は国家自身によって行われるべきことであり、これに関し余は貴族院議員三宅秀教授と相談した。氏の理解ある努力により、史跡及び天然記念物保存の議が1911年3月31日徳川頼倫侯爵、徳川達孝侯爵、田中芳男氏及び三宅秀教授により貴族院に提出された。その後、衆議院に於いても提案され、両提案は国会を通過した。国会に於ける議決の8年後、1919年に名勝及び史跡ならびに天然物の保護の法律が公布された。

1912年母とよ、実家の姓中島は74才で死去。1913年6月23日、大学よりの奨励金により世界旅行に出発。シベリヤ経由でヨーロッパに行き、7月ライブチツヒ着。恩師 Pfeffer 教授とご家族にご挨拶申し上げた。ベルリンでは就中、天然記念物の管理に努めておられ、経験のある Hugo Conwentz 教授を訪ねた。同年10月10日チェコのブリュンに興味深い訪問をした。Hugo Ilfis 教授の案内で、Gregor Mendel 広場の美しい Mendel 記念碑と Augustiner 修道院の Mendel の居室と彼が実験を行った庭園を見た。この庭には特別のブドウの木があり、Iltis 教授の説明によれば、これは Mendel の実験植物の一つであった。Burkart 教授は当日の同伴ではなかったが、ご親切にもこの木の枝を同年冬シベリヤ経由で余に送付された。これらの枝は直ちに大学の附属植物園に植えられ、それはやがてたくましく成長し、近代遺伝学の創立者の記念に役立つものとなっている¹²⁾。

1914年初頭、リビエラに旅し、Alwin Ber-

ger 博士の案内でペンティミア近郊のラ・モートラにある Thomas Hanbury 卿の美しい興味ある庭園を訪れた。

英国ではキュー庭園¹³⁾に短期間逗留し、2月アメリカ合衆国に渡った。この時期は北アメリカ南部の熱帯植物相の観察に最適で、フロリダに旅行し、マイアミのエバーグレイズに足をのばした。

次いでアリゾナへ向かいタソン砂漠研究所に D.T. MacDougal 教授を訪ねた。氏が親切にも余のために計画したヒザノ・カノンへの興味ある遠足では、サボテンの奇妙な植物相、特に素晴らしい *Carnegia gigantea* を見る機会を得た。

同年6月、アメリカよりハワイを経て日本に帰った。第一次世界大戦勃発のまさに3か月前であった。

1920年 帝国学士院会員

1924年 停年退官、東京帝国大学名誉教授

1927年4月 天然記念物保存の日本の代表としてアメリカ合衆国主催の会議に出席するためハワイに赴いた。キラウエア国立公園およびハワイ諸島の他の地域の遠足では、極めて豊富な風土特有の植物を観察することが出来た。

1929年5月、三度びジャワを訪ね、第4回太平洋学術会議に参加した。多くの遠足の中でクラカトウ—現在オランダ東印度自然保護地域—への遠足は最も興味深いものであった。この島の植物と動物の世界は、1883年の火山の大焼失にも拘わらず、現在ではほとんど回復したように思われた。つた植物及び他の寄生植物は森林の木の最高の梢に至るまで認められた。

チィボダスにも滞在した。当地には1902年2度目のジャワ旅行の際に逗留している。

国による天然記念物保護の最初から余は、内務省、その後、文部省から植物学上の天然記念物の研究の委託を受けた。約15年間現在まで、学問上興味ある300以上の植物を現場で研究してきた。この大部分は今日、法律によって保護されている。

過去を振り返ると、昔日に危険にさらされていた国内の多くの貴重な天然の宝物が、法律の制定により今日天然記念物として保護されていることは、非常に喜ばしいことである。

1935年5月28日、ウィーン学士院通信会員
これ以前に余はドイツ植物学会、オーストリア動植物学会、ドイツ樹木学会等の通信会員であり、最近エディンバラ王立学会の名誉会員に推挙された。

東京 1935年12月

以上が「自伝」の全訳である。地名は片假名書きにしたが、人名は発音の問題があるので、原名のままにした。三好の用いたサクラ、ショウブの学名には現在、変更されているものがある。

〔註〕

- 0) 三好友衛 美濃岩村藩士、後に岩村県庁軍事局指令、明治5年11月20日没、46才。
- 1) 三好とよ 友衛の妻、天保9年生、大正元年没、74才。
- 2) 中島性善 福井県三国町(当時の三国湊)松下西方寺の住職、三好の母とよの兄、學の伯父に当る。天保4年生、明治35年没、70才。
- 3) 矢田部良吉(1851-1899) 明治10年に東京大学が創設された時の初代理学部植物学教授。
- 4) 伊藤圭介(1803-1901) 幕末から明治にかけての植物学者、東京帝国大学名誉教授。
- 5) ウィルヘルム・プエッファー(1845-1920) ライプツヒ大学教授、植物生理学の権威。
- 三好の門下の柴田桂太、大野直枝博士も教えを受けている。三好は「フェッファー」先生と呼んでいた。プエッファー教授の蔵書は現在、岡山大学の資源生物科学研究所に収蔵されている。
- 6) ユレイウス・フォン・ザックス(1832-1897) ヴェルツブルグ大学教授、近代植物生理学を確立し、プエッファー博士など多くの英才を育てた。
- 7) トーマス・ヘンリー・ハックスリ(1825-1895) 英国の著名な比較解剖学者、チャールズ・ダーウィンの進化論の辯護者でもあった。彼の名著『A Manual of the Anatomy of Invertebrated Animals』(1888)を本学図書館に購入してある。
- 8) エルンスト・ヘッケル(1834-1919) エナ大学動物学教授、ダーウィンの進化論を擁護した。「個体発生は系統発生を繰り返す」との彼の考えはよく知られている。彼の人類進化の啓蒙書として有名な『The Evolution of Man』(英訳本1906)も本学図書館に購入してある。
- 9) ボイテンゾルグ植物園 現在のインドネシアのボゴール植物園(Bogor Botanical Garden)、オランダ統治時代からの長い歴史をもつ東南アジアで最も充実した植物園。
- 10) 矢野文雄(号は龍溪) 矢野に就いては百科事典などをご覧いただきたい。三好の岳父、嘉永3年生、昭和6年没、82才。
- 11) 三好美津子 矢野文雄の長女、華族女学校出身、明治28年三好學と結婚、筆者の母方の祖母。明治7年生、昭和19年没、71才。
- 12) メンデルのブドウ 三好がこのブドウを日本に伝えることになった。東京大学理学部附属小石川植物園に今日も健在。最近朝日新聞の夕刊(平成6年12月16日)のコラムに、岩槻邦男植物園長の記事が載ったので、コピーを添えておく(図7)。これは渡辺さんのご厚意によるものである。
- 13) キュー植物園(Kew Royal Botanic Gardens) ロンドンのリッチモンドにある世界的に有名な植物園。

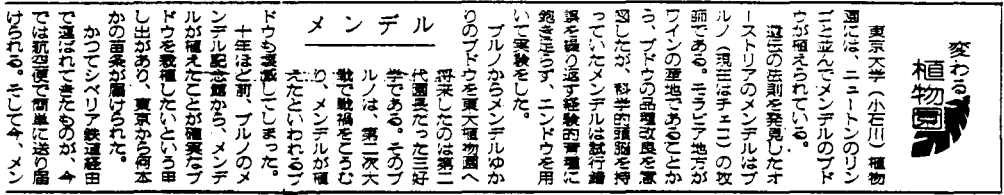
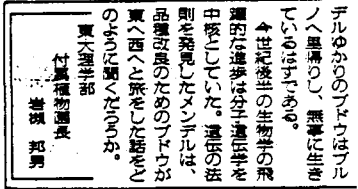


図7 朝日新聞夕刊(平成6年12月16日号)のコラムに載ったメンデルのブドウ



あとがき

筆者の三好學に関する報文は、この研究資料Ⅳで9編になるが、まだまだ多くの資料が手許に残っている。これからも調査、整理を進め、纏り次第、報文にする予定である。

今回も本学図書館の主任司書甘利麗子さんの手助けを受けた。厚くお礼申上げる。

文献・資料

(1) 三好學(1993)『授業日誌』解説付き、岐阜県岩村町教育委員会

- (2) 長谷川栄・新井孝喜(1994)三好學『授業日誌』に見る明治10年代前半の小学校における教育実践、日本教育方法学会第30回大会、自由研究8、④1-12
- (3) 安藤裕・酒井敏雄(1992)日本に近代植物学を興した三好學小伝、清泉女学院短期大学研究紀要第10号、149-174
- (4) 安藤裕・落合照雄(1994)植物学者三好學研究資料Ⅱ、同上第12号、137-162
- (5) Miyoshi, Manab(1936) Autobiographie von Manab Miyoshi、植物学雑誌、第50巻580号、40-45
- (6) 安藤裕(1993)植物学者三好學研究資料Ⅰ、清泉女学院短期大学研究紀要第11号、203-226
- (7) 安藤裕(1994)同Ⅲ、同上第12号、(11)- (34)